

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

気付き 動く 心と体／社会福祉法人立野みどり福祉会 立野みどり保育園（東京都）

まだまだ寒さを感じる日々ですが、生き物たちは春を迎える準備をしています。例えば、2月から3月に産卵をするカエルがいます。園内や近隣で、カエルの産卵を見ることはできますか？卵を見付けることはできますか？今回は、オタマジャクシの事例を紹介いたします。木や草の芽、カマキリの卵や蝶のサナギなど、季節が大きく変わり誕生に出合えるこの時期、そして、自分たちの成長を実感できるこの時期だからこそ体験できることを、是非、保育に取り入れてください。



○ オタマジャクシを育てる／4～5歳児

3月上旬、2歳児が散歩でカエルの卵を見付け、保育園に持って帰った。この日から、様々な気付きをし、生き物との関わりを考える子どもたちの姿が見られるようになった。

✦ カエルの卵と出合った当初の様子／3月上旬

● 保育者の工夫

登降園時に誰でも観察できるように、保育園の玄関に飼育箱を置く。

Rちゃん（2歳児）：「（祖父に）これ、読んで」

祖父：「カエルの卵です、だって」

Rちゃん：「へびかと思った！」

Aちゃん（2歳児）：「これ、何？」

母：「カエルの卵よ」

Aちゃん：「リボンみたい」

Sちゃん（3歳児）：「なんで水の中にいるんだろ？」

Fちゃん（4歳児）：「だってさ、水の中じゃないと乾いちゃうんだよ、カエルと一緒にだよ」



など、初めてカエルの卵を見た子ども、カエルの卵を知っている子どもなど様々な姿が見られる中で、保護者も交えながらやり取りをするが見られた。毎日、楽しみに水槽の中を覗き込み、少しずつ変化していく様子を楽しんでいた。

✦ 事例1 園に返す？育てる？／3月下旬

● 保育者の工夫

友達の気付いたことを、クラスで話す機会を作る。

卵からたくさんのオタマジャクシが孵り、抜け出た膜の周りに群がっていた状態を見て、Sちゃん「狭いよ」Kちゃん「どん
どん水が少なくなって生きられなくなっちゃうよ」と気付いた。

SちゃんとKちゃんの声をクラスのみみんなに伝えたところ、それに対して様々な声が出た。

「公園に返した方がいいと思う」

「まだ玄関に残したいよ」

「ご飯、食べてるのかな？」

「食べなきゃ、小さいままだよ」

「オタマジャクシって何食べるの？」

「昆虫ゼリーでしょ」

「えっ、食べるの？」

「うーん」

「水だと思う」

「葉っぱしか食べないよ」

「ホールの本棚に行ったらカエルの絵本（図鑑）に書いてあるかもしれない」

「それよりも公園に返した方がいいよ」

「このまま返したらお腹ペコペコじゃない？」

「うん…」

「パパが小さいとき飼ってて、シラスをあげたら死んじゃったって」

「じゃ、どんなの食べるか知ってるんじゃない？」

「オタマジャクシが大きくなって、手がビヨンってなったら面白いだろうな
あ、でも公園に返した方がいいよ」

「返したら食べるものがないよ」とやりとりをし、4歳児なりにたくさんの考えが出た。



保育者が話をまとめる手助けをしながら、結果としてオタマジャクシは公園に返さずに“ご飯”をあげることになった。その
ため、“ご飯”は、図鑑で調べることと家の人に聞いてくることになった。

翌日、子どもたちは「鯉節を食べる」という図鑑の記述を見付け、調理室から鯉節をもらい、オタマジャクシの餌にして様
子を観る。「食べないね」「大きいのかも、もっと小さくした方がいいよ」などと話しながら観察したが食べない。O先生
はオタマジャクシを飼ったことがあると知った子どもたちは、O先生に尋ねると米粒とパンを餌にしたことが分かる。子
どもたちは、米粒とパンを試すとオタマジャクシが食べることが分かり、飼うことになる。オタマジャクシのケースを部屋に
置き、子どもたちは毎日観察する。

✦ 事例2 水草や石を探そう／4月上旬（5歳児クラスに進級当初）

● 保育者の工夫

進級した子どもたちが、引き続き主体となって新しい保育室で飼育できるようにする。

Rちゃん「オタマジャクシが大きくなって狭そう」と、再び、飼育箱が狭いことに気付いた。すると、「じゃ、返しちや
う？」「もう、池はきれいに洗われてたから戻してもかわいそう」（公園の人工池は春夏に水遊び場になるので掃除され、
カエルの卵を捕ってきた時とは環境が変わっている）と話す。

Sちゃんが「ばら組（4歳児クラス）の時にさ、カブトムシ入れていた大きいケースがあるじゃん、それに入れてもいいよ」と言うと、みんなで早速物置から飼育箱を探し出した。大・中・小の3種類の大きさの物が見付かった。そこで、子どもたちは「どの大きさがいいかな」「大きい方がいいんじゃない？」「うーん」「図鑑に飼いや載ってたよ」「それ見て決めればいい？」「そうだね」と相談し、絵で解説してある図鑑で確認する。図鑑に描いてあった飼育箱のイメージで、一番大きい飼育箱を選んだ。さらに、その図鑑から「石を入れた方がいい」「水草を食べるんだって」などと今まで気付かなかったことに気付いた。「明日のお散歩は空堀川がいい！」カエル卵を捕ってきた人工池には持って帰れるような石や水草はなかったため、川原に散歩に行こうと考え付いた。

● 保育者の工夫

子どもたちの話し合いや考えを実現できるように、翌日、川原へ散歩に行き、じっくりと時間をかけて水草と石を収集できるようにする。

川原を歩きながら、子どもたちは「水草ってどれだろう？」「水の中にあるのかな？」と話し、それぞれが川原に生えている草を観察し始めた。一人が水際の草を見て「これがいいんじゃない」と言い採った。「図鑑に載っていたものと似ているね」一人が採り始めると、皆その種類の草を探し採っていた。石も水際から選んでいた。「これがいいかな」「大きすぎじゃない？」と友達同士、見せ合いながら大小様々な石を拾った。そして、保育園に戻りオタマジャクシを大きなケースに移し替える。ケースに入れた草は数日のうちに葉が細り、筋だけになったり透明になったりした。子どもたちはそれを見て「葉を食べている」「オタマジャクシが死んでないからきつとそうだ」と結論付けた。その後も散歩先で同じような葉があった時は採ってくるようになった。



✦ 考察

- 事例1では、オタマジャクシを自然に返すか飼うか？餌をどうするか？という疑問や問題を、子どもたちが自ら話し合い解決しようとしていた。しかし、結局、飼育経験のある保育者から教えてもらうという保育者発信の安易な展開になってしまった。子どもから出ていた『家の人に聞いてくる』ことを実行したり振り返ったりして、オタマジャクシの食べ物を知るために子どもたちがもっと試行錯誤できるような働きかけがあったら、子どもの気付きや活動は深まったのではないだろうか。
- 事例2では、「オタマジャクシが狭そう」という気付きをきっかけに、子どもたちが主体的に展開している。この気付きは、4歳時に卵を見た当初にもあった。しかし、5歳時には、大きいケースがあったことに気付き“探す”という行動に繋がった。そこから、「もう一度図鑑を見よう」という気付きを生み出し、さらにケースの大きさを確認し決めるという行動に変化していった。また、図鑑を見直したことで石や水草を入れた方がよいと気付き、それらを採りに行くという行動へと展開した。このことから、気付きには「初めての気付き」と「経験からの気付き」があり、体験が広がったり深まったりしていることが分かった。

